

Title	関口さんの死を悼む
Sub Title	
Author	大谷, 弘道(Otani, Kodo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要発行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.35 (2003. 2) ,p.235(10)- 233(12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030210-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

関口さんの死を悼む

大谷 弘道

「お酒の何がそんなにいいのですか。飲むといい気持ちになるのですか。」

こんな無粋な問いに、「そうなんだよね。本当にいい気持ちになるんだ。」と、関口さんは大真面目に答えてくれました。このやり取りをしたのは、二〇〇一年の春先のこと、関口さんが入院していた病室です。「入院してからは一滴の酒も飲んでいない」と、そのとき関口さんは誇らしげに話しました。私はその後大学の特別研究休暇を得てドイツに旅立ち、半年後の九月二十五日、彼の訃報に接することになります。

関口さんに初めてお会いしたのは、今から二十五年ほど前の一九七七年のことです。長髪気味で控えめな文学研究者然とした風貌が印象に残りました。ドイツ語部会のあとに、「これからドイツへ留学をする」とい

う挨拶を受けました。翌年、私は彼がいるアーヘンに留学しましたが、そこでまったく別人になった関口さんを見て驚きました。作家タイプの文学研究者は、短めに髪をカットした、身ぎれいな実務家に変貌していたのです。軽快なステップで、如才なく私を市内へと案内してくれ、町のホテルでも大学の外事課でも、応対に出たドイツ人と丁々発止と勢いよくドイツ語を話して、私には一言もしゃべらせませんでした。

私の一年目の留学期間は、彼の二年目の留学期間とちよほど重なります。ご家族を紹介され、お宅に何度となく招待されて、本当に楽しいときを過ごさせていただきました。アルコールが入って心が軽くなると、関口さんが必ず口にするのが、ドイツに来て、自分の無能ぶりに仰天したこと、また、どれほどの苦勞をし

てコミュニケーションができるドイツ語を習得したかということでした。さらには自分改造の勉強方法を具体的に紹介しながら、日本のドイツ語教育に対する批判を繰り返して、将来の夢を熱く語りました。留学のテーマであったはずの「ノサック研究」の「ノ」の字も、ついに関口さんの口から出なかつたと記憶しています。アーヘン工科大学では、一年間同じゼミナールに出席しましたが、そこで彼は積極的に発表しました。その発表の内容はともかくとして、ドイツ語を操ることに途方もない熱情を示して人を圧倒しました。「ぼくは生まれ変わった」と、幾度となく私に話し、身につけたドイツ語力を駆使して、その出来、不出来にまさに子供のように一喜一憂しました。

関口さんは生涯に二度、大きなチャレンジをする機会を得ます。NHKテレビ「ドイツ語講座」の講師、それに藤沢湘南キャンパス設立への参加です。その仕事に自分本来の役割を見出して、全力を傾注し、課せられた仕事に没頭し、苦勞を喜び、楽しみ、繊細な神経をとことんすり減らします。本人に会うと意気軒昂ですが、その消耗ぶりは甚だしく、はた目には彼が自分自身に向き合

うことを避けて、仕事に逃避しているようにすら思われたほどでした。酒に酔いつぶれた関口さんを肩に担いで自宅に送っていく道すがら、東京駅のベンチで一休みし、一度病院で精密検査を受けること、酒とたばこは少し控えたほうが良いことを改めて話しましたが、「わかつた、わかつた」と言うばかりで、頑として聞き入れませんでした。

ともに苦勞した視聴覚研究室の授業、独自に立ち上げた夏休みドイツ語合宿、日吉キャンパスでの学生部の仕事、辞書製作の仕事と、彼が藤沢に行くまで長い年月にわたり、私は仕事を通じて関口さんとはほぼ同じ体験をしてきました。自分の立てた目標に邁進するあまり、しばしば視野狭窄に陥る彼の姿も間近から見ました。

彼は、自分で欲しないことを決して人に強制せず、また自分のやり方を人に押しつけることも決してしませんでした。ただ、ドイツ語学習の喜びは遠慮会釈なくストレートに表現し、「ドイツ語教育」という大儀のためには勇敢に人を仕事に誘いました。関口さんは教材作成という分野で、天才的な才能を発揮します。彼の文学的素養は、それに大いに役立ったと思います。教材の構成、

ストーリーの展開は魅力にあふれていて、若いころひそかに作家を志望したという彼のことばは容易に信じられました。酒を飲みながら、時間を忘れて夜を徹し、定規のり、カッターナイフなど、彼が収集した自慢の文具を使いながら教材を作成している楽しげな彼の姿を想像しました。それは、関口さんにとってまさに充実した至福の時間だったろうと思います。時間に追われる仕事をいつも求めながら、「ぼくの夢はね、年をとったら女房と縁側で日向ぼっこをしながら、ポーッと過ごすことなんだ」と、すぐにでもできることを、ずっと遠い先の夢のこととして話しました。

関口さんは、決して人に指図されず、指導されずに自分の行き方を自分で選び取っていった人です。今の時代としては、かなり若年で亡くなりましたが、彼は、彼なりに自分の人生を選び取り、幸せであったと思います。しかし、私は彼の生き方に大いに不満です。彼の死は残念であり、痛恨の思いが、胃液が口のなかに逆流するのに似て、今でも私を不快にさせます。